

Message for the 20th anniversary issue

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5743

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



社会情報学部創設20周年に寄せて

大妻女子大学

副学長 栗原 裕

社会情報学部創設20周年、いままさに教育と研究において揺るぎなき地歩を築きあげられたことをお慶び申し上げます。

平成4年創設、それに先立って平成元年から3年間にわたる準備を重ねたと聞きます。平成4年という年はわが国の短期大学の最隆盛年で、入学定員も志願者数も頂点に達した年でした。これは時間が経ってはいじめてわかることで、その時点では見えなかったことです。それより数年前、全国の短期大学が隆盛を続け、本学の短大部6学科が1学年2,000人超の定員と12,000人超の志願者を誇っていた時期のことです。その時期に本学の教育の軸足を2年制の短大から4年制の学部に移すという選択がなされたのでした。機を見るに敏、軌道修正は的確であったと言うほかありません。平成4年を頂点として、以後、全国の短期大学は大規模に志願者を減らしていくからです。このことが一つ。

そして、もう一つ、4年制新学部を開設するに社会情報学部をもってするという選択が、実に進取の気象に富んでいたと言わなければなりません。社会情報学部の新設は女子大学初、全国の共学諸大学にも先駆けていました。この名称を冠する学部は10周年を迎えた段階で4大学、現在でも7大学のみであると聞いています。家政と文学の古典的な2学部から成る女子大学に第3の学部として社会情報学部が誕生するというのは、考えてみれば、きわめて合理的で時宜にかなった、まぎれもなき新構想であったでしょう。はるか後に、雨後の筍のごとくに4文字（やがて6文字）の学部が続々と登場し、学位名称の多様があきられることになりましたが、それらと一緒にされるわけにはいきません。気合いも品格も違います。

そういう斬新で的確な判断に支えられた新構想に改めて思いを致し、紀要『社会情報学研究』の創刊号から最新号まで20冊を机の上に積み上げ、拝読しました。梅棹忠夫の情報産業論とかマーシャル・マクルーハンのメディア論で育った文学系人間にとって、『社会情報学研究』は研究対象が多岐にわたり実に魅力的でした。中川秀恭学長の紀要発刊の辞には「教育・研究の目標を、社会における情報を市民・消費者のパースペクティブにおいて、あらゆる角度から総合的に捉える」としていて、これが原点になって全体を統率していたかと思われました。なお、「学部発足後半年も経たないうちに編集したため、多少各自の専門に偏ったところも見られるかもしれませんが」と断りが添えられています。既存の学問分野の基盤を離脱超越した *Novum Organum* を樹立することが新学部の目標として合意されていたと見えます。

その意図は先生方各位に徹底していたらしく、創刊号には模索の跡が「「情報」とは何かー生物学的アプローチ」（石井喜久雄）、「情報とは」（村上弘幸・藤田晃）、「社会環境情報学専攻の教育と研究について」（飯塚貴美代・寺井稔）といった諸論に見られ、第2号においても「ある新名称に基づく新設学部における学生の専門領域の認識と学習意欲の把握の試みー大妻女子大学社会情報学部1期生を例に」（若林佳史・前納弘武・草柳千早）のように足下の現実を押さえておこうとする調査もなされていました。「音読と黙読ー歴史上どこまで確認できるか」（柳沼重剛）などは専門の蘊蓄を駆使しつつ、思い描かれた社会情報学部的追及になっていて、一読興奮しました。

全20巻の紀要論文のうち理解の届くのが限られるのは、相手が専門学術論文であるから仕方ないとして、それでも、一夏の休暇の終わりを楽しみました。

学部の今後のさらなる発展を切に祈ります。